

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会
杵島農業改良普及センター

「稲作情報（第12号）」について（送付）

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第12号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。この情報はホームページ（以下URL）にも随時公開しています
<https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00323270/index.html>

杵島農業改良普及センター

検索

1. 気象概況

アメダス観測値（白石）

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R3 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R3 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R3 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R3 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R3 (hr)	平年比 (%)
7月	1	25.4	27.4	2.0	29.2	31.3	2.1	22.4	24.7	2.3	90.3	40.5	45	16.3	14.2	87
	2	26.1	27.3	1.2	30.1	30.0	-0.1	23.0	25.6	2.6	83.2	49.0	59	20.3	2.9	14
	3	26.7	27.5	0.8	30.9	32.2	1.3	23.5	24.4	0.9	61.9	12.0	19	24.2	31.7	131
	4	27.3	27.6	0.3	31.8	33.1	1.3	23.9	23.8	-0.1	43.1	6.0	14	28.0	31.7	113
	5	27.7	29.0	1.3	32.5	33.9	1.4	24.2	24.7	0.5	36.2	0.0	0	31.4	26.2	83
	6	28.1			33.0			24.5			39.2			41.0		

○7月5半旬の平均気温は、平年に比べて1.3℃ほど高く推移した。また、曇天が続いたことで寡照となった。
 ≪福岡管区気象台の1か月天気予報（7月29日発表）（予報期間 7月31日から8月29日まで）
期間のはじめは降水量がかなり少ない状態が続くでしょう。 向こう1か月の気温は、ほぼ平年並みの見込みです。

2. 水稻情報田の生育状況（調査日：7月27日）

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	主稈 出葉数L	葉色 SPAD	概 要
夢しずく 6/12移植 武雄市橋町	本年値	82.6	362	11.1	40.1	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年より高く、茎数は平年より少ない。 主幹出葉数は平年より0.4葉少ない。 幼穂長5mm 幼穂形成始期7月22日頃 ※生育ステージでは平年より2日程度早い 葉色は平年より濃い。
	平年値	76.9	387	11.5	38.7	
	平年比	107	94	-0.4	+1.4	
さがびより 6/19移植 武雄市橋町	本年値	61.7	441	10.6	39.3	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年より高く、茎数は平年並み。 主稈出葉数は平年並み。 葉色は平年より薄い。 ※中干し7/24～7月28日
	平年値	59.2	440	10.7	41.1	
	平年比	104	100	-0.1	-1.8	

※夢しずくおよびさがびよりの平年値はH21～R2の平均値。 耕種概要は稲作情報第8号参照

3. 管内の生育状況（7月30日時点）

- 1) 七タコシヒカリ：現在、黄熟期～成熟期である。収穫は7月30日から始まる。
- 2) 夢しずく（普通期）：現在、幼穂形成期である。

《参考》管内における夢しずく生育状況：7/30 時点

移植時期（市町）	生育ステージ	備考
6/16 移植（白石町）	幼穂形成期	幼穂長 5mm
6/19 移植（白石町）	幼穂形成期	幼穂長 2mm

- 3) ヒノヒカリ、さがびより：現在、分けつ発生盛期～穂首分化期である。

4. 今後の管理

(1) 夢しずく（普通期）

○現在、幼穂形成期である。

- ・幼穂形成期から出穂期にかけては要水量が増加する時期である。特に穂孕み期から穂揃期（8月1日～8月18日）は浅水管理とする。連日の猛暑日により白乾している圃場を散見されるので、特に水管理は留意する。（別紙干ばつ対策資料参照）
- ・初期生育量が十分に確保できずに、幼穂形成期以降草丈が伸長しうっぺいした圃場を散見する。そのような圃場では紋枯病を確認しているので、早期防除に努める。

(2) 普通期水稻

○現在、分けつ発生盛期～穂首分化期である。

7月の曇天の影響を受けて、草丈が高く推移しており、葉色が濃くうっぺいした圃場を散見される。そのような圃場では、「葉いもち病」の病斑を確認しているので、穂肥の施用については、下記の診断基準に基づいて適期適量施用する。

①ヒノヒカリ

- 6月下旬に移植されたヒノヒカリは、まもなく幼穂形成始期を迎え穂肥施用時期となる。
下記の診断基準により穂肥診断を必ず行い、適期適量の施用につなげる。

【表 ヒノヒカリの穂肥診断基準】

草丈 cm 幼穂形成始期時	葉 色		穂肥施用時期			
	群 落	SPAD	出穂前	幼穂長	穂肥施用量 (N成分)	
80 cm 以下	薄い	3.0 以下	34 以下	20～22 日	1～2mm	3.0kg/10a
	標準	3.0～3.5	34～38	18～20 日	3～5mm	3.0kg/10a
	濃い	3.5～3.8	38～39	16 日	5～15mm	2.5kg/10a
	濃い	3.8 以上	40 以上	15 日	15～30mm	1.0kg/10a
80 cm 以上	薄い	3.0 以下	34 以下	20～22 日	1～2mm	2.5kg/10a
	標準	3.0～3.5	34～38	18～20 日	3～5mm	2.5kg/10a
	濃い	3.5 以上	38 以上	穂肥は施用しない		

②さがびより

穂肥の施用時期は、幼穂長 10mm が基準となる。

幼穂長 5mm 以上になったことを確認してから、下表の診断基準により穂肥を施用する。

【表 さがびよりの穂肥診断基準】

	幼穂形成始期の 草丈cm	葉 色		幼穂長	出穂前 日数	施用量 N成分kg/10a
		群 落	SPAD			
穂肥診断時	7.5cm以下 (標準)	2.5以下	33以下	5ミリ	20~18日	2.5kg
		3.0	33-37	10ミリ	18日	2.0kg
		3.5	37-38	15ミリ	16日	1.0kg
		3.8以上	39以上	施用しない		
	7.5cm~ 8.0cm	3.0以下	36以下	10ミリ~15ミリ	18~16日	1.5kg
		3.0以上	37以上	施用しない		
8.0cm以上	施用しない					

(3) 病害虫対策

- 8月の病害虫予察情報（7月29日付け佐賀県農業技術防除センター発表）によると主要病害虫の発生量は以下のとおり。

作物名	病害虫名	平年比	前年比
水稻 (早植え)	穂いもち	並	やや多
	紋枯病	やや多	やや多
	トビイロウンカ	やや多	やや少
	コブノメイガ	並	少
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多
水稻 (普通期)	穂いもち	並	並
	紋枯病	やや多	やや多
	白葉枯病	並	並
	もみ枯細菌病	並	並
	トビイロウンカ	やや多	やや少
	コブノメイガ	並	少
	フタオビコヤガ	並	並
斑点米カメムシ類	やや多	やや多	

1) いもち病

- 葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期の防除を徹底する発生が多いと予想される場合（上位3葉に葉いもち病の病斑を確認した時）には穂揃い期にも防除を行う。薬剤の使用にあたっては、使用時期や回数等の農薬の登録情報に注意する。
- 圃場内に放置されている補植苗は「いもち病」や「ごま葉枯病」の温床になるため、すみやかに除去する。
- 葉色が濃い圃場で、葉いもち病の病斑を確認している。**
- 窒素過多は発生を助長するので、適切な肥培管理を行なう。
- BLASTAM 情報は別紙参照。

BLASTAM（ブラスタム）は、いもち病菌の感染に適した条件が表れたかを判定するモデルである。

ブラスタムで好適条件が現れた場合、約1週間後からいもち病の初発あるいは病斑数が急激に増加することが予測されるので注意する。



葉いもち病の病斑
葉色が濃い圃場にて確認

BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の出現状況

佐賀県農業技術防除センターHPより

7月

	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日
白石	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
伊万里	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

- 1: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温は20℃未満)
 2: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温は25℃以上)
 3: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温は15～25℃の範囲外)
 4: 準好適条件(湿潤時間は湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い)
 ●: 好適条件(湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した)
 -: 好適条件の出現なし
 ?: 判定不能

2) ウンカ類

- ・ 本年は、平年に比べ20日早い梅雨入りとなり、5月中旬から飛来を確認され、5月11日、7月4日、7月8～9日、12～13日にトビロウンカの飛来が確認されている。

8月の気温は平年より高いと予想されており、今後増殖する恐れがあるため、本田防除の適切な実施が極めて重要である。

図1 トビロウンカにおける各世代の発生予測を参考に、圃場ごとの発生状況を確認したうえで防除対策を徹底する。

なお、トビロウンカにおける各世代の発生予測は、その後の気温等により若干変わるので、最新データは、佐賀県農業技術防除センターHP等を参照する。

※7月29日現地巡回調査では、トリフルメゾピリム剤を使用している圃場の幼虫は若令～中令を確認している。

管内におけるウンカ類の払い落とし調査(R3)

調査日	セジロウンカ		トビロウンカ		ヒメビウンカ		備考
	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	
7月29日							
6月12日移植	4	0	0	0	6	0	夢しづく情報田(武雄市橋町) ※ゼクサロン剤
6月12日移植	0	0	0	0	2	0	夢しづく(江北町) ※ゼクサロン剤
6月16日移植	0	0	0	0	2	0	夢しづく(白石町馬洗) ※ゼクサロン剤(播種同時)
6月16日移植	0	0	0	0	1	0	夢しづく(白石町辺田) ※ゼクサロン剤 ※密苗
6月19日移植	0	0	0	0	2	0	夢しづく(白石町新明) ※ゼクサロン剤(播種同時)
6月19日移植	1	0	0	0	3	0	さがびより情報田 ※ゼクサロン剤
6月19日移植	2	0	0	0	2	0	さがびより(武雄市橋町) ※ゼクサロン剤

※25株はらい落とし総数

3) コブノメイガ

- ・ 今年、6月3～4日頃、7月3～4日頃に飛来があった。本年は、前年に比べて飛来量は少ないものの、断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。

このため、1回の散布で全ての飛来波のコブノメイガを完全に防除することは困難であるが、トビロウンカの発生状況も考慮して効率的かつ効果的な防除ができる時期に実施する。

- ・ コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期の7日後(幼虫ふ化揃い期)である。



コブノメイガによる食害

4) 斑点米カメムシ

- ・山間早植えはまもなく出穂期を迎えることから、斑点米カメムシ類を中心とした乳熟期（穂揃い後10日目頃）の防除を徹底して、斑点米カメムシの被害防止を図る。
- ・出穂10日前までの畦畔除草は、耕種的防除の観点から効果的である。カメムシはイネ科雑草を好むことから畦畔だけでなく圃場内に発生している雑草の除草も併せて行うよう努める。畦畔を100m歩いて、カメムシが3頭いたら、要注意である。



エノコログサやヒエが多発している畦畔はカメムシの住処となっている

5) 紋枯病

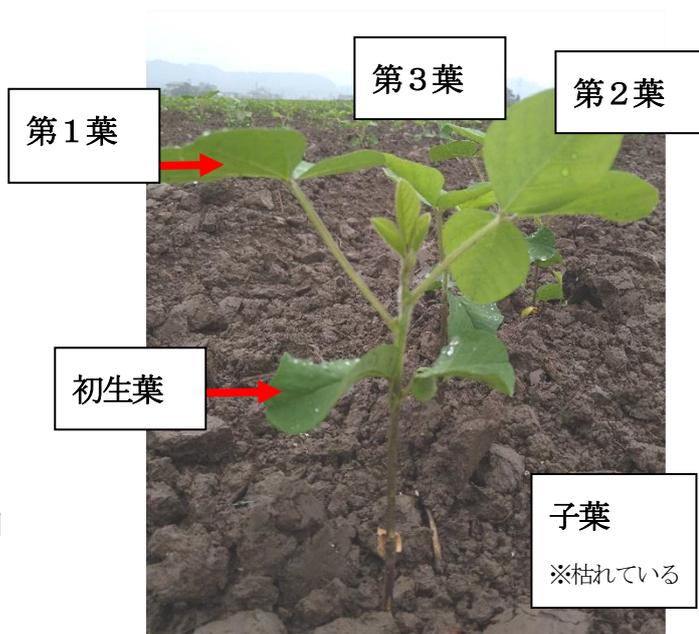
- ・幼穂形成期以降は、各品種とも病気に対する抵抗力が弱まる。今後気温が高くなることから、紋枯病が一気に進展する可能性があるため発生には十分注意する。
- ・病斑が上位葉の葉鞘に進展する前の防除が効果的である。
(液剤、粉剤の場合は出穂10日～20日前の防除を目安とする)



紋枯病

4. 大豆作情報（今後の管理）

- ・播種別の生育状況は以下のとおりである。
 - ①6月25日～ 29日：本葉7葉～8葉期
 - ②6月30日～7月2日：本葉6葉～7葉期
 - ③7月13日～ 15日：本葉1葉期～2葉期
 - ④7月15日以降：出芽期
- ・右の写真は、7月14日播種された大豆である。
(本葉 第3葉目が出ている) なお、出芽は7月19日であった。
- ・「フクユタカ」は、初生葉(最初に出る双葉)が出てから本葉4葉くらいまでは4日に1枚程度で出葉する。その後、2～3日の間隔で出葉し、7～12葉で開花期となる。



(1) 中耕・培土

①中耕・培土には様々な効果があり、積極的に収量を上げるための重要な作業である。

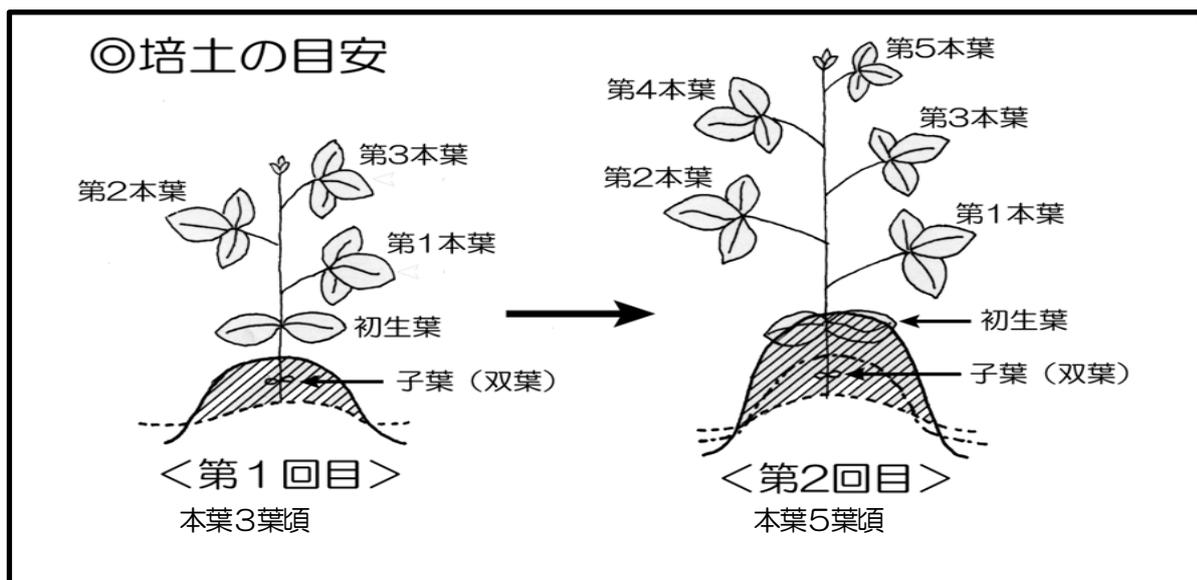
中耕・培土の主な効果

- 培土部分からの不定根の発生を促進し、養水分の吸収をよくする。
- 株元に土を寄せて、倒伏を防止する
- 土壌を膨軟にし、通気性を改善する
- 土壌を攪拌し、雑草の発生を抑える
(雑草を防除する)
- 畦が作られ、排水性が向上する
(表面排水を促進し湿害を受けにくくする)

- 1回目 (本葉2~3葉期) …生育初期の雑草防除、土壌中への酸素供給。
- 2回目 (本葉4~5葉期) …除草効果+土壌通気性向上
+新根発生促進 +倒伏防止。

※ 培土は開花1週間前までに終了すること！

②開花後の中耕は断根による悪影響が大きくなるので開花前に終わる。



2) 雑草対策

- イネ科雑草が多いところでは、ナブ乳剤(イネ科雑草3~8葉期まで)、ポルトフロアブル(イネ科雑草3~10葉期まで)で防除する。なお、除草剤の混用は薬害を助長するので行わない。
- アサガオ類が発生している圃場が散見されるので、圃場内はもとより、まくら地や畦畔で発生している場合も、必ず抜き取るか薬剤散布での防除を徹底する。
※出来るだけアサガオの本葉2~3葉までに薬剤処理する。ただしアサガオの種類によっては効果が劣る場合もある。
→アサガオ類は、繁殖力が強いことからそのまま放置すると次年度以降、さらに発生量が多くなるので、初発での薬剤防除を徹底する。
- また、近年ホオズキ類の発生も増加しています。アサガオ類同様、難防除雑草であるため徹底した抜き取り、薬剤散布を行う。
- ※ 除草剤を散布する際は、周りの水稻にかからないよう注意し、無風時に処理する。



図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第3版、2021年7月26日作成)

1. 5月11日頃、7月3～4日頃(図では7月4日)、7月8～12日頃(図では7月9日)の飛来虫を起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(7月26日以降は平年値)を基に作成した。

2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。

3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。